雲鷹丸第８次航海実習報告

本航は明治45年及び大正元年度に於ける漁撈科第３学年生徒第１学期実習及び海洋並に浮遊生物調査を目的としたるものにして、6月下旬より7月上旬に於て諸般の準備を整へ生徒26名を乗船せしめ、7月10日品川を発し、10月31日帰着したり。其詳細に就ては航海摘要日誌、衛生状態報告、各正午位置表、航跡縮図並に各地に於ける調査報告書を提出して高覧に供す。

摘 要 日 誌

明治45年7月7日　船体器具等の修繕悉く竣功整備し、炭水糧食の搭載亦終了し、出航準備完了す。

7月 8日　指導教官黒田、鎌田両氏、海洋及生物調査掛助手川上氏並に生徒26名搭乗す。

7月10日　所長は坂元、松井２氏を伴ひ来船せらる。此日専売局の運送船来着したるを以て、塩187俵(80斤入)を受取り、午後2時終了したるを以て、直ちに館山に向って出航し、午後8時5分館山港に到着す。下所長及随員２氏、同夜退船せらる。

7月11日　捕鯨器具及ドーリーの搭載をなし、午後生徒の健康診断を行ふ。後所長より一同に訓誡を与へられ、又石川博士は講話せられたり。

7月12日　港内に於て捕鯨準備演習を行ふ。此日生徒宮本義永病気の為め上陸治療を許す。

7月13日　午前1時12分館山を発し、午前5時45分布良沖に至りて帆走に変じ、捕鯨漁場に向ふ。終日降雨あり。

7月14日　午後暴天の為め縮帆跳躍法を＿ふ。

7月15日　同　前

7月16日　天候回復したるを以て増帆復針航行す。

7月17日　同　前

7月18日　既に捕鯨漁場に入りしを以て、早朝機関を用意す。10時37分一群の抹香鯨隊を認め、汽走追尾約1時間にして之に接近す。而して遂に恨悔及び難き椿事に遭遇し、遠藤政三、石切山鈞の２生徒を失ひ、１鯨を得て実習を中止し、遺体捜索2日にして遂に得る所なく、尋て暴天の襲来に遇ふて捜索続行不可能に至りしを以て、止むなく寄港報告手続に及びたるは当時詳細報告を呈したる所の如し。

7月22日　夜半函館に入港す。

7月23日　本所及海事官庁並に死者遺族に報告をなす。此日電命により黒田技師上京す。

7月24日　再び捜索の為め、遭難地に航行すべき電命ありしを以て、直ちに炭水を補充して準備をなす。

7月25日　午前11時函館を出帆して遭難地点に向ふ。航途、檣頭、船橋及船首の見張りを厳守す。

7月26日　早朝該地点に至り一層見張を厳にして縦横航行捜索に従事す。

7月27日　同　前

2-1 (66)

7月28日　同　前

7月29日　午前11時半函館に帰港す。

7月30日　先帝陛下崩御旨逝たる御報に接し、一同恐懼(きょうく)惜く所を知らず。喪旗を掲げ喪章を附け、謹慎奉悼す。此日黒田技師及生徒宮本義永帰船す。

大正元年7月31日　午後3時函館台町興龍寺に於て施餓鬼を行ひ、亡遠藤、石切山の為めに追悼式を挙ぐ。

8月1日　所長より臨機出航すべき電令ありしも、天候不良の為め見合はす。

8月3日　天候静定したるを以て、午前2時函館を出発し、ニコライスクに向ふ。午後7時奥尻島を経過し、微風を得て帆走に変ず。是より連日帆走航行す。

8月10日　夜半韃靼(だったん)海湾(注:間宮海峡の旧称)に入り、無風となりしを以て汽走に転ず。

8月11日　午後3時半デカストル港に投錨し、税関官吏の臨検を受け、水先人の所在地を告げられ、日没転錨して水先人モイシーフを雇上げ乗船せしむ。

8月12日　午前1時抜錨進航し、午前8時55分強風の為め黒龍江に投錨す。午後3時風力稍柔らぎたるを以て、抜錨進行し、午後5時5分ズーレ浅瀬に至りて投錨、潮高時を待つ。

8月13日　午前6時35分潮高13呎の信号を見て抜錨前進し、午後1時26分ニコライスクに到着投錨す。此日領事鈴木陽之助氏及島田商店主其他在留邦人の主なる者数人来訪あり。又露国諸官吏来船臨検したり。

8月14日より19日迄の間に於て、漁業、貿易等に関する調査を行はしめたり。其詳細は別冊調査報告書に在り。本船滞在中、鈴木領事、島田元太郎氏及在留日本人会理事入野寅蔵氏等は懇篤に斡旋の労を執り、見学上多大の便宜を与へられたるは小官等の深謝する所たり。

8月20日　正午ニコライスクを発し、午後1時40分大チヒリ漁場に到り、魯人経営に掛る漁場実景を見学せしめ、午後4時50分再び抜錨して河流を下り、午後6時12分オゼルパに投錨し、再び前回様式の大漁場を見学せしめたるに、視察終了帰船したるは夜半に及びたり。

8月21日　午前7時抜錨して再び下流に進航し、8時21分プイル漁場前に投錨し、同漁場及同所碇泊英国冷蔵汽船ブロードモーフ号見学を行はしめたり。午後2時40分該方面に於ける見学を終了したるを以て、鈴木領事、島田元太郎氏及本所出身の稲見(弥一郎、6回卒)、植木(憲吉、11回卒)、奥川(教孝、伝習所8回卒)の3氏等は此所に告別退船し、本船は抜錨江口を下りたり。午後4時10分ラングリ島沖の浅灘上水深不足の為め投錨仮泊明天を待つ。

8月22日　午前4時35分浅灘上13呎半の水深信号を受けて抜錨進航し、5時11分全く江口を脱出して仮泊し、水先人モイシーフ氏を解雇してラングリ島に送らしむ。午前7時14分水先人を送りたる端艇帰船したるを以て直ちに抜錨進航、オコツク海千島群島に向ふ。10時より午後1時の間に於てビーム・トロール漁を試みたる事2回なりしも、好漁を認めず。夜半より帆走に転じて進航す。是より連日帆走の途次に於て、航跡縮図上

に記せる諸点(川上助手報告に詳なり)に海流瓶を投入し、

8月29日よりキシカ沖合より臨機各地点に於て鱈(たら)の試漁を行ひ、又数回荒天を凌ぎつつ漸次南進して、

9月9日　朝千島群島中、幌筵島(ぱらむしる)村上湾に到着したり。

9月10日以後強風連吹の為め出漁の機なきを以て、技業実習及機関術講習に従事せしめたり。

9月13日　御大葬を遥拝す。

9月19日　午後1時30分村上湾を出発し、幌筵島東南側の漁場に向ひしも、尚高浪ありて漁業実習に適せず。午後5時荒畑岬南方約12海里距岸約1海里水深17尋の所に仮泊す。其夜風力再び強まりて、仮泊し難きに至り抜錨帆走す。

9月20日　尚風浪止まず、漁業実習し難きにより汽走南進し、温禰古丹(おんねこたん)島及磨勘留(まかんる)島を巡視し、父島丸の消息を得んとしたるも見る所なかりき。

9月21日　午前4時45分帆走に転じ、樺太に向て進航したり。

9月26日　無風となり天候及び気圧静定して容易に風を得べき兆候なきを以て、午後5時より汽走し、

9月27日　午前8時樺太大泊に到着す。樺太泊中、同庁水産技手東郷保一氏の懇切なる案内を受け、黒田、鎌田両教官指導の下に生徒一同上陸し、樺太漁業株式会社及伊藤某漁場等数ヶ所を視察し、水産陳列場の見学をなしたり。臨時水夫川島喜代次病気に罹り庁立大泊病院に入院治療の為め上陸許可し、30日付解雇手続上申す。

10月1日　大泊出航汽走小樽に向ふ。其夜逆風漸々募りしを以て、

10月2日　午前4時利尻島鷲泊に寄港したり。

10月3日　北方風を得て、午前2時抜錨帆走す。

10月4日　天明増毛沖合より無風となりしを以て汽走し、正午小樽に到着したり。小樽泊中、高嶋水産試験場、小樽水産学校、札幌農科大学水産科等に就て見学調査をなさしめたり(別冊調査報告あり)。

10月10日　午後5時20分小樽抜錨、青森に向ふ。夜半神威岬沖合を経過し、帆走に転ず。

10月12日　午前7時渡島国小島付近に至りて無風となり、流潮急にして危険なるを以て汽走に転ず。午後3時40分青森港に投錨す。青森泊中、同県水産課に就て講話を聴かしめ、冷蔵汽船株式会社、魚市場等の調査及市内見学をなさしめたり。

10月15日　遠洋漁業科生徒照井賢三父病気見舞の為め、又漁撈科第3学年生徒宮本義永陸軍召集命令を受けたる為め、共に上陸出願したるにより許可す。

10月16日　午前零時青森抜錨、2時50分平館灯台を経過したる頃より暴風雨襲来したるを以て、函館寄港に決す。7時33分函館入港す。

10月17日　天候回復したるを以て午後6時16分抜錨し、鍬ヶ崎に向ふ。10時25分尻屋岬沖に至りて適風を得、帆走に転じ、

10月19日　午後1時25分鍬ヶ崎に到着投錨す。鍬ヶ崎碇泊中、宮古水産学校、宮古水産試

験場及菊地和七氏の大謀網漁場を見学せしめたり。

10月21日　午後6時宮古を抜錨し萩濱に向ふ。

10月22日　午前5時30分金華山海峡に至り仮泊し、11時30分再び進航し、午後0時44分鮎川港に投錨し、各捕鯨会社の事業場に就て処理方法を見学せしめたり。

10月23日　午前4時30分鮎川を出帆し、6時17分萩濱に投錨す。萩濱碇泊中、黒田、鎌田両教官、川上助手及学生一同渡波水産学校及試験場見学に赴き、又水産学校生徒は本船に来観したり。

10月26日　午後3時36分北風を得て抜錨、帆走館山に向ふ。

10月27日　午後8時10分犬吠埼灯台沖に至り無風となり、逆潮盛にして押流さるる事甚しきを以て汽走に変ず。

10月28日　午後1時25分館山に投錨す。館山泊中、捕鯨具一切及鱈2,500尾を揚陸したり。

10月31日　午前8時12分館山を発し、午後2時24分品川に投錨す。

衛生状態

臨時水夫川島喜代次関節炎に罹りたる他は一同良好の状態に在り。殊に生徒は別冊先事務員の提出したる衛生状態報告の如く良好なりき。

各地に於ける調査

各地調査に関する諸報告書は左(下)の如し。

A	ニコライスク漁業調査報告	1冊	
B	札幌出張報告　IよりⅦに至る	7冊	
C	青森市魚市場	1冊	以上9冊

添付図面及表

航跡縮図及正午所在表　　各1部

右（上）為報告也

大正元年11月5日　　雲鷹丸船長　浅利孝爾

水産講習所長　下　啓助殿

明治45年及大正元年度第1次(雲鷹丸第8次)航正午表(略)

航海日数 74日　　直航航程 5,118浬

8-4(49)

報　告　書

1. 帆　船　　雲鷹丸
1. 船籍港　　東京市
1. 所有者　　農商務省
1. 船　長　　甲種船長　浅利孝爾　東京市麻布区北新門前町3番
1. 発航地　　館　山
1. 到着地　　函　館
1. 報告すべき事実の発生したる場所　　北緯38°17'　東経144°52'
1. 報告すべき事実の発生したる年月日時　明治45年7月18日　午後0時30分
1. 報告すべき事実の顛末

本船は太平洋上に於ける捕鯨実習、沿海州の漁業調査、オホツク海の鱈漁実習、並に海洋及浮遊生物調査等の命を受け、明治45年7月10日品川を発して、館山に寄港し、捕鯨準備演習を行ふ事両日にして、13日午前1時同港を発し、或は汽走或は帆走して、7月18日午前10時37分前記場所の北々東方約10海里に於て一群の抹香鯨に邂逅(かいこう)(思いがけなく会うの意)したり。当日は南東微風にして洋面穏静実習に適する天候なりしを以て、汽走遂迫1時間余にして約10間の距離に接近し、第3号、第4号の2艇を発したるに、暫時にて各1頭を射止め、負傷鯨に曳かれ相後先して疾走(けっそう)(速く走る意)するを見、本船亦其近傍を進航して監視したり。11時55分第1号、第2号の両艇を発したるに、彼等亦須臾(しゅゆ)(しばらくの意)にして新たに各1頭に投銛的中したり。是に於て4艇各1鯨に曳かれて四散し、漸次相隔てり。其の最遠のものは本船より監視容易ならざるに至りしを以て、本船は各方に巡航中なりしが、午後0時30分恰も本船が第3号艇(当時最も北方に離れり)方面に至りて監視せるに際し、他3艇は漸々南々東方に遠ざかるを以て、本船船首を回し巡視に赴きつつあるに当り、中間に在りし1艇(該方向に於ける最も近きもの)偶々其影を消したるを以て、本船は最高速度を以て該方向に急進したるに、俄然該艇の転覆せるを発見し、37分之に接近し、直ちに船尾艇を下ろし、遭難艇員6名を救助し得たるも、尚2名所在不明なりしを以て、百方捜索の手段を尽したるも更に見る所なく、救助せられたる艇員の陳述によれば、2名は溺死沈下の不幸に陥りしものとありしも、尚捜索続行の為め位置目標物として海流瓶20本を投入し置き、檣頭及船橋上に厳重見張数名を保ちて付近を巡航し、屍体遺物等捜索に従事したるも遂に得る所なかりき。是に於て第3号艇を除き各艇に命じて鯨を放棄し係船せしめ、遭難艇と共に収容し了りたる上、再び付近捜索を継続したるも、杳(よう)として得る所なく、遂に日没に至りて中止したり。而翌19日早朝より復び推定位置を汽走巡航して捜索に従事する事前日の如く。午後4時50分に及びしも更に得る所なく時方に風浪漸く募りて続行不可能に至りしを以て之を断念し、茲に予定の実習を中止し、顛末報告の為め寄港を急ぎたり。

遭難艇は第2号艇にして平素中砲艇と称し小形那威式砲を備へり。当日は鎌田指導教官指揮の下に、最後に本船を発したるものなりしが、その着弾したる鯨は巨大勇猛化にし

て瀕死掉尾の一躍は甚しく、艇員想像外に出て遂に恨悔及び難き災厄を生ずるに至りし事、別冊鎌田技手報告及同艇乗組生徒の遭難記事に在るが如きを以て本報告に添付す。

遭難艇乗組員左(下)の如し。

無恙者	指揮者	教官	鎌田　武造	
同	舵　取	水夫	鈴木茂三郎	
同	漕　手	生徒	田面　欽次	
同	同	同	岡本　重治	
同	同	同	塚崎　謙吉	
同	同	同	高柳繁次郎	
死亡者	同	同	遠藤　政三	明治23年9月23日生　盛岡市
同	同	同	石切山　鈞	明治21年2月19日生　静岡県

右(上)及報告候也

明治45年7月23日

右(上) 船長　　浅利孝爾

明治45年7月18日金華山沖合に於て抹香鯨の群に遭ひ、各艇は本船を離れて捕獲に向ふ。而して中砲艇は小官指揮の下に、漁夫鈴木茂三郎を舵手とし、生徒遠藤政三、石切山鈞、田面欽次、塚崎謙吉、岡本重治、高柳繁次郎の６名を乗組ましめて、午前11時55分に出艇せり。此の時、他２艇は既に各々鯨に銛を打ち込して曳かれつつあるを見、本艇は第１号艇近くに鯨群を認め、之れに向って突進し、忽ちにして１頭の巨鯨を打ち、銛の右肋部に的中して曳かるるに至る。斯くて艇員は機敏に之れが捕獲に力を尽し、鯨も亦常に血を噴き、血を流して本艇を曳き、思ふが侭に回遊して免れんとし、又他の鯨群は皆此の手負の鯨を包囲して援助を与へ、相前後して進むと雖も本艇は機を見ては銛綱を手繰り、或は延長し、斯くて愈々鯨に接近するを得たれば、第1発の破裂弾を的中せしめたり。注視すれば、鯨も銛を撃ち込まれて曳くこと約20分後、銛の致命傷なりしに加へて出血甚だしかりし為め、殆ど勢力衰ひ最早水中に沈降する力もなく、浮遊状態に陥れり故に、愈々艇を進めて殺剣を使用する為め、銛綱を引き締め、鯨に接近すること約5間に及べる頃、忽ちにして鯨は瀕死の猛勇を振ひ、急に方向を変じ、艇の左舷後方に猛然潜入せり。依て銛綱を延ばすことを命じ、艇員は必死に銛綱を延べしも、艇の前進惰力未だ失なはざるに、鯨の艇を反対の方向に強引せし為めに、艇は舳を半ば其の方向に転回せると共に、左舷に急激なる傾斜を起こしたるを以て、銛綱を切り棄てて此の危険を免れんと、斧を手にせし間もなく、転覆するに至れり。依て艇員８名は直ちに艇より海中に飛び込みたり。小官は浮上

お-6(41)

して左右を顧みれば、艇員皆付近に無事浮遊せるを見、安堵の思ひをなしたり。然れども、近き１号艇の姿は勿論、本艇は鯨と共に沈入して、其の所在明かならず。且つ艇体付属物の付近に漂流するものなく、只眼界遠く本船を認めしを以て、互に元気を励まし、必ず離散することなく、務めて身体の付属物を取り離し、空しく精力を消費することなく、風下に向ひ浮漂して、今に来るべき本船の救助を待つべきを諭し、小官は絶えず言語を尽して各員を激励しつつありしが、波浪の来る毎に遊泳に長けたる者は前進し、力なき者は後れ、就中生徒遠藤政三は波浪の間に間に浮沈するの有様に、之れを援助せんとする時、一本のオール浮流しあるを見出し、之れを与へんものと其の方指して遊泳せる時、悲しき声を聞きたれば、漁夫にオールを取り来ることを命じ、小官は再び引き返し、高声にて激励しつつ進む中、遠藤政三の姿を見失ひたり。依て其の近くに遊泳せる生徒に問ひ尋ねたるに、今迄は其の姿を認めたるに如何せしやとのことに、共に其の付近を捜索せしも見当たらず。斯くする中に塚崎謙吉の苦しく悲しげなる声を耳にし、近づきて見れば之れ亦遊泳の力なく危険の状態なりしも、恰も此の時、前に漁夫をして持ち来たらしめしオールありしを以て、之れを与へ、元気を励まし、本船の吾々に近づき来れるを語りて慰め、他を顧みては声を限りに激励しつつ、各員より大丈夫なりとの答えを聞き、塚崎謙吉の救助に尽しつつありたり。斯くて本船より卸されたる救助艇に助けられ、見れば石切山鈞の姿見えざるに驚き、共に前方に遊泳せる岡本重治に尋ねしに、如何にせしものか、元気よく遊泳中、急に沈みたりとのことに、之れを救助艇に告げ、其の付近を捜索せしも、遠藤政三、石切山鈞の姿更に不明にして、見当らず。然るに塚崎謙吉は艇中に救はれしも既に溺死の状態なりしを以て、一旦本船に帰り応急手当を為すの必要あるにより、６名は本船上に救助せられたりしと雖も、遂に前記２名の溺死したるは小官の遺憾に堪へざる所にして又悲しき限りなり。

右(上)報告候也

明治45年7月21日　　技手　鎌田武造

8・7(42)

捕鯨艇遭難記事

明治45年7月18日午前11時55分、第２号捕鯨艇は砲手鎌田教官、舵手鈴木茂三郎、漁夫漕手遠藤政三、石切山鈞、岡本重治、塚崎謙吉、高柳繁次郎、田面欽次の６学生乗込み、鎌田教官指揮の下に鯨群に向ひ猛進す。暫時にして発砲し、１鯨に銛を打込み、艇は鯨に曳かれ水煙を立てつつ縦横に曳廻さる。軈(やが)て第一の破裂矢は射たれ、見事命中し、さしも猛烈なりし大鯨も稍々鈍りたるものの如く遊泳力を減じたり。最後の破裂矢を射たんと銛綱を手繰り、鯨に艇の近づきたる刹那、鯨は何に驚きしか急遽方向を転じて遁走せんとす。為めに舳に取れる銛綱は架を放れて舮に来り、左舷の艇員は極めて危険の位置に立ちしも、能く此難を避け舮方のビットにより銛綱を延長せんとしたるや、鯨の綱曳力過大にして、艇は甚だしく左舷側に傾きたり。然るに舳は重き中砲を搭載せる為め、此部は早くも水の浸入する所となり、艇は忽ちにして転覆し、海中に曳込まれたり。此間実に数秒にして、全員はよく鎌田教官の指導の下に死力を尽して作業し、変に処せしも綱を切断するの間隙なかりき。依りて全員一斉に海中に飛込み直ちに覆艇及オール等の浮上せるものを得んと勉めしも、付近一物をも認めず、やむを得ず各員は鎌田教官の熱心なる鼓舞と注視とにより相応呼して遊泳し、互いに相離れざらんことに勉めたり。遠藤君はもと水泳の心得浅きを以て特に鎌田教官、鈴木漁夫の必死の援助を受けしも力及ばず、遂に波間に体を見失ひしは遺憾ながら実に已得ざりき。本船は遥かに吾等の遭難せるを発見し、全速力を以て救助に赴けるを認め、只管(ひたすら)疾く救助せらるるを待ち居りしに、水遊老練なる石切山君は元気克く先頭遊泳中、足部に痙攣にても起せしか、水泳の妙技も岡本君の援助も効なく、これ又同君を見失ふに至りしは実に此上の遺憾と云ふ可し。茲に二友を失ひ、言ひ知れぬ悲痛に沈み、浪はますます高く、愈々危険に陥り、塚崎君の如き最早危く見えしかど、鎌田教官、鈴木漁夫の援助により、残員６名は皆悉く無事、午後0時42分本船に救助せられたり。後直ちに溺死者の死骸捜索に従事せしも、遂に発見するを得ざりしは吾等の甚だ愁傷に堪えざる所なり。此難に際し、浅利船長を初め、黒田漁撈長、鎌田教官以下、船員一同の懇篤なる救援は吾等の深く感謝して止まざる所とす。

明治45年7月19日

岡本　重治（印）
塚崎　謙吉（印）
田面　欽次（印）
高柳繁次郎（印）
（注：大正2年第16回漁撈科卒業生）

ハ－ト（ハ3）